

次世代型近海はえなわ漁業の実証調査



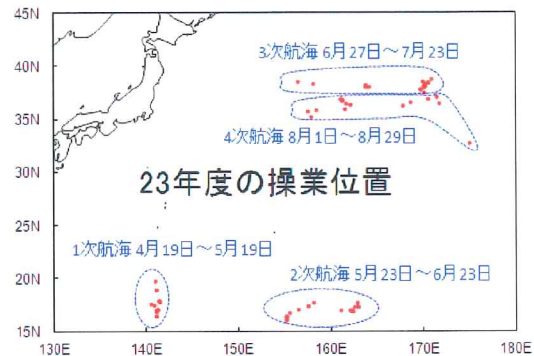
調査船：海青丸（149ト）

調査期間：4/17～8/31

調査海域：北太平洋西部海域

調査のねらい

1. 中緯度海域における深縄操業の開発
2. シャーベット状海水氷鮮度保持効果の確認
3. 近海はえなわ船の収益性改善の検討
4. 海青丸の燃油消費実態の把握



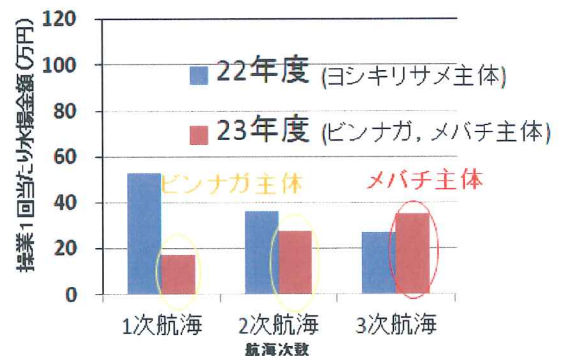
平成23年度操業位置

平成 23 年度調査の主な成果等

1. 社団法人漁業情報サービスセンターとの共同研究を通じて、衛星情報を活用することによりマグロ類の漁場探索には効果があることが示唆された。
2. 昼間の深縄操業において、マグロ類の分布水深に相当する針の到達水深が水深 300m 付近に達していることが確認された。漁獲状況も付近で操業する当業船と遜色はなかった。
3. 震災対応として、気仙沼近海はえなわ船の水揚げ港確保のため、銚子港での定期的な水揚げを行った。
4. メバチを主対象とした操業では、前年同時期のヨシキリザメ操業時に比して 1 日当たりの水揚げ金額を上回り、当該時期にはメバチを主対象とした操業も効果的であると思われる。漁獲対象種をヨシキリザメのみならずメバチにも拡大することで、ヨシキリザメへの漁獲圧の減少及び安定した価格維持の観点から、当該資源の持続的な利用にも有効な手段と思われる。更に、この調査で得られた漁獲情報などを活用して、気仙沼魚市場の復興を想定した近海はえなわ漁船の操業モデル構築について、中央水産研究所と連携して取り組んでいる。
5. その他情報

(1) シャーベット状海水氷処理によるマグロ類の初期冷却効果については、中央水産研究所と連携して分析を行っている。

(2) 海青丸の燃油消費実態を把握し、省エネに資する運用方法を提案するために水産工学研究所と連携して分析を行っている。



平成22年度並びに23年度の航海回数別の操業1回当たりの水揚げ金額